

黒い土の少女

2008(平成20)年10月2日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督・原案・脚本=チョン・スイル/出演=ユ・ヨンミ/チョ・ヨンジン/パク・ヒョヌ/
ユ・スン Chol/カン・スヨン(特別出演)(スポンジ配給/2007年韓国映画/89分)

……これは、韓国アートフィルム界の旗手チョン・スイル監督の本邦初公開作品！ 主人公は、廃鉱寸前の炭鉱のまちに住む9歳の少女。時代に、環境に、家族に取り残された9歳のヒロインのあっと驚く選択とは……？ おしゃれな韓流ドラマとは正反対の、鋭い問題提起に注目！



「韓流シネマ・フェスティバル2008」vs.

「韓国アートフィルム・ショーケース」

2008年10月18日から11月14日までシネマート心斎橋で「韓流シネマ・フェスティバル2008」が開催される。これは2005年の第1回から数えて5回目。今回の統一テーマは「ラブ&ヒューマン」だが、その試写として私が観たのが『M(エム)』(07年)と『ハピネス』(07年)と『優雅な世界』(07年)の3本。

これに対して、「韓国アートフィルム・ショーケース」が開催されるのは今年が2度目。1度目は2006年暮れに開催された『キムチを売る女』『不機嫌な男たち』『許されざるもの』『映画館の恋』の4本の上映で、2度目の今回は『黒い土の少女』『俺たちの明日』『永遠の魂』『妻の愛人に会う』の4本が上映される。

この「韓国アートフィルム・ショーケース」を主催するのはKOFIC(韓国映画振興委員会)。その委員長であるアン・ジョンスク(女性)の「ごあいさつ」には、「『シュリ』『JSA』など、作品性と商業性を兼ね備えた韓国映画が日本に紹介されたことにより、韓国映画を愛する観客の方々が少しずつ増えるようになりました。しかし、いつのころからか、商業的な作品だけが偏って日本に紹介されていることを知り、私ども映画振興委員会は、韓国映画の多彩さを日本の方にお見せしたくなりました。

そうしたなか、インディペンデント系の作品に限りない熱情を持っているイメージフォーラムと出会い、韓国アートフィルム・ショーケースの開催につながりました」と、かなり挑発的な文章が。

1回目に上映された『キムチを売る女』はすばらしい作品だった（『シネマルーム17』455頁参照）が、さあ2回目の「韓国アートフィルム・ショーケース」で上映される『黒い土の少女』は……？

同じフランス留学組でも大違い！

中国の戴思杰^{ダイ・シージェ}監督は珍しくフランス留学組だが、彼が監督した『小さな中国のお針子』（02年）（『シネマルーム5』294頁参照）と『中国の植物学者の娘たち』（05年）（『シネマルーム17』442頁参照）は、いかにもフランス的な薫りっぱいのおしゃれな雰囲気映画。

しかし、同じフランス留学組でも韓国のチョン・スイル監督の長編5作目で本邦初公開作品となる『黒い土の少女』は、おしゃれや洗練された雰囲気とは全く無縁の、徹底的に暗く重々しいもの。それは、この映画の舞台である韓国東北部の江原道にある「とある村」がさびれゆく炭鉱まちという設定にも起因しているが、この映画で描かれるのは暗く沈んだものばかり。折しもアメリカ下院における「金融安定化法案」の否決によって株価が暴落し、国際的規模の金融危機が世界を襲っているこの時期にこんな映画を観ると、一層気分が暗くなることに。

このように、同じフランス留学組でも戴思杰^{ダイ・シージェ}監督とチョン・スイル監督は大違い！

さびれたまち、病気、クビ、事故……

1950年代から60年代にかけての石炭から石油エネルギーへの転換によって、日本の炭鉱業は斜陽産業となっていったが、そんな産業構造の変革は韓国でも同じだったようだ。炭鉱夫の父ヘゴン（チョ・ヨンジン）をもつ9歳の少女ヨンリム（ユ・ヨンミ）が住む江原道の「とある村」は、かつては炭鉱業で栄えたらしいが、今は廃鉱寸前で、時代の流れに取り残されたまち。ヨンリムの兄トング（パク・ヒョヌ）は精神障害を持っているため、知能レベルがヨンリムより下。したがって、ヨンリムは9歳ながら3人家族の母親代わり。

こんなまちに早く見切りをつけて次の仕事を探し、転身していく才覚があればいい

のだが、頑固者のヘゴンにはそんな芸当はとともムリ。そんな中、よくある話だが、ヘゴンはじん肺症に罹患していることが判明し、たちまち会社をクビに。そのうえ、社宅退去の補償金で買ったトラックも事故を起こし、ヤケになったヘゴンは昼間から酒をあおることに。そこでヘゴンが考えたのが、入院すれば保障を受けることができるということだが、さてヘゴンの病気の程度は……？

国が違えば、2歳違いで大違い！

ちっちゃな女の子を主人公にした映画はたくさんあるが、最近私の印象に残っているのは、第80回アカデミー賞作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞を受賞した『JUNO / ジュノ』(07年)の16歳の女の子ジュノは別格として、『パンズ・ラビリンス』(06年)の少女オフェリア、『全部、フィデルのせい』(06年)の9歳のアンナ、そして『コドモのコドモ』(08年)の11歳の持田春菜。『コドモのコドモ』は『JUNO / ジュノ』のさらに先を行き、「11歳で子供を産むことになれば……」というすごい問題提起作だった。しかし、『黒い土の少女』を見てみると、そんな楽しいハプニング(?)にうつつを抜かすことができる日本がいかに平和で豊かな国かということがよくわかる。『黒い土の少女』のチェ・ヨンリムは11歳の持田春菜より2歳だけ年下だが、その歳でこんな苦勞を……。

持田春菜を演じた甘利はるなは400人のオーディションで選ばれた新人だったが、チェ・ヨンリムを演じるユ・ヨンミは1999年生まれの韓国のTV界で数々のドラマに出演している名子役とのこと。本作でマラケシュ国際映画祭主演女優賞を受賞しているとのことだが、それも当然と思える、セリフを極端に削ぎ落とした見事な演技に注目！

ここでもネコいらすがポイントに

『キムチを売る女』(05年)の結末も悲惨だった(『シネマルーム17』455頁参照)が、『黒い土の少女』の結末も悲惨。『キムチを売る女』の舞台は中国東北地方の寂しいまちだったのに対し、『黒い土の少女』の舞台は韓国の人里離れた江原道のとある村と大きく異なるが、共通しているのは貧しさ。そして、貧しさと同居するイヤな動物がネズミ。さらに、ネズミ退治に重宝するのはネコいらす。

昨今大問題となっている数々の食品偽装事件やメラミン混入事件を見ていると、世

も末だとの実感を強くするが、もし食べ物にネコいらずが混入されたら……？ 奇しくも、韓国アートフィルム・ショーケース第1回で上映された『キムチを売る女』の結末と、第2回で上映される『黒い土の少女』の結末に同じネコいらずが大きな役割を果たすとは……？

さて、キム老人（ユ・スンチョル）から「ネコいらずはここにしまっておくから、注意するんだよ」と言われていた9歳のヨンリムは、なぜタンスの上部にしまっておるそれに着目？ そして、その後いかなる行動を……？

2008(平成20)年10月9日記

ミニコラム

裏表紙⑥この頃が1番カッコいい？

裏表紙⑥は、自宅で法律書をバックにくつろぐ司法修習生時代の私。1972年4月から74年3月までの2年間の司法修習は、前期3カ月と後期3カ月は東京での全体修習、合間の1年半は実務修習地の大阪で4カ月ずつ検察・弁護・民事裁判・刑事裁判を学ぶもの。公務員並みの給料を頂いたうえの修習であるうえ、今と違って完全な「売り手市場」だから、待遇のいいことこの上ない。また東京の湯島にあった司法研修所（94年からは埼玉県和光市南に移転）には全国から500名弱の修習生が集まり、10クラスに分かれて講義と起案をくり返すから刺激がいっぱい。そして千葉県松戸寮には地方出身の男女約350名が集まるから、その楽しさは半端ではない。また学生運動の延

長線として当然のように青法協（青年法律家協会）に入った私は、その方面での活動もあれこれと。したがって、研修所での勉強と自主的勉強としての各種視察、コンパ・麻雀・卓球等のお遊びで何とも充実した2年間を過ごすことに。今は修習生も就職活動が大変だが、私は弁護修習をした事務所で、「君、うちの事務所に来るか？」「はい、お願いします」で終わり。就職活動とは一切無縁で、勉強と遊びに明け暮れたわけだ。私の身長は約167cmだが、当時の体重は57～58kg。還暦を迎えた今は64～65kgを維持しているが、やっぱりこの頃が1番ハンサムかつ知的で、カッコいい？

2009（平成21）年3月2日記